

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 6 日現在

機関番号：32621

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25380697

研究課題名(和文) 現代日本社会における祝祭空間の構造変動に関する実証的研究

研究課題名(英文) The Structural Transformation of Festivals in Contemporary Japan

研究代表者

芳賀 学 (HAGA, Manabu)

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：40222210

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,300,000円

研究成果の概要(和文)：日本における伝統的な都市祝祭は、町内と呼ばれる地域共同体単位で営まれ、もともとは主催者も参加者も観客も地域の人が務める行事であった。それゆえ、祭りの形態は、地域ごとに異なり、日本全国には多種多様な祭りが存在してきた。ところが、1970年代頃から、特定の祭りが全国的に伝播するようになった。その代表格が、「阿波おどり」と「よさこい系祭り」である。

本研究では、これら2群の祭りが現在の日本でいかなる形で実施され、そこにどのような人々が主催者として参加者として観客として参加しているのが、こうした祭りの変化は、関係する人々に新たにどのようなメリットとデメリットを与えたのか、といった疑問の解明に取り組んだ。

研究成果の概要(英文)：The traditional urban festival in Japan has been held by every local community. And the organizer, the performer and the audience were the residents of the same community. Therefore, a great variety of festivals have existed in Japan. But, from 1970's the structure of Japanese festivals were transforming gradually, and new type of festivals, for example "Yosakoi Festivals" and "AWA Dance Festivals", were diffusing rapidly in the whole of Japan. In this study I have investigated these two groups of Japanese festivals, and have made clear the following two questions. First, who is the organizer, the performer and the audience of these new type of festivals? Second, what type of merits and demerits for the persons concerned are resulting from the transformation of Japanese festivals?

研究分野：社会学

キーワード：祝祭 よさこい 阿波おどり 都市 非日常 若者

1. 研究開始当初の背景

伝統的と言われる日本における都市祝祭(都市における祭り)は、古くは京都の葵祭に源流を持ち、多くが江戸時代中期・後期に成立した。それらは、松平誠が「町内」と呼んだ生業を共にする小さな地域共同体単位で営まれ、当初、祭りの舞台も、祭りのパフォーマーも、祭りの見物人も、この町内の住民が中心であった。

しかし、第二次大戦後の高度経済成長期から、こうした祭りの形に大きな変化が生じてきた。当初研究者に注目されたのは、見物人が外部の者に置き換わる観光化であったが、やがてより大きな変化が確認されるようになった。日本生活学会編『祝祭の百年』(ドメス出版、2000年)によると、その1つが、「阿波おどり」や「よさこい系祭り」(高知「よさこい祭り」を起源とする祭り)などが、地域を超えて日本全国に拡大するようになったことである。それまで祭りは、街や地域のアイデンティティと結びついた形で、個性的に営まれていたが、「阿波おどり」は全国70か所、「よさこい系祭り」は200か所以上で行われるまでに伝播拡大した。そして、「よさこい系祭り」を筆頭に、祭りの形態の自由化や、地域共同体に基盤を置かない組織形態に急速に変化した。1980年代末の「東京高円寺阿波おどり」を調査して、後者のような組織形態の新しい祭りを松平は「合衆型祝祭」と呼んだ。その後、この種の祭りの研究は、松平自身によるもののほか、内田忠賢や矢島妙子らによって、2000年代にかけて「よさこい系祭り」を対象に記述的に行われ、私自身も2006年ごろから「阿波おどり」と「よさこい系祭り」(主として東京圏で行われている祭り)を対象に、実態把握と活動の特徴の解明を主な課題として研究を進めてきた。

2. 研究の目的

本研究においては、「よさこい系祭り」(とその先駆的形態である「阿波おどり」)の全国伝播を中心的な事例として、現代日本社会で生じている祝祭空間の構造的変動を研究対象としている。そして、この種の祭りの実態について正確に把握することを目指すと同時に、その社会的な発生メカニズムとその社会的影響を解明することを目的としたいと考えた。

その際、祝祭の舞台となる地域社会、担い手となる祭り集団、パフォーマーとなる祭り参加者(=個人)という3つのレベルを設定して祝祭を捉え直し、それぞれのレベル内部の変容と同時にレベル相互の連関形態の変化を分析することを通じて、目的とするメカニズムや影響についての解明を目指した。

このうち、実態把握に関しては、「東京高円寺阿波おどり」を対象とする調査研究は、松平のもの以降まとまった成果はなく、1990年代以降どのような変化が生じたかという、

その後の経緯の把握自体が課題となる。また、「よさこい系祭り」に関して、2000年代中盤以降、やはりまとまった研究はなされておらず、ここ10年ほどの動向を確認する必要がある。

さらに、社会的メカニズムや影響の解明を通じて、現代日本における祝祭現象に関する従来よりも詳細な実態把握がもたらされるのみならず、人々が生きがいを見出す共同体的な集団の構成原理が現代においてどのような変化を遂げているのか、その変化は、社会や個人に対してどのようなメリットとデメリットを提供しているのか、大都市圏と地方都市圏との違いや新たな関係構築の可能性などのテーマについても、これまでの研究とは異なる新しい知見を見出すことを目的とした。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するために、下記の3つの方法を採用した。

(1) 予備的な文献サーベイ

研究初年度の2013(平成25年)度を中心に、祝祭に関する社会学・人類学・民俗学などの研究書や論文など、先行業績のサーベイを行った。さらに、「よさこい系祭り」や「阿波おどり」などの現代の祭りに関しては、国会図書館や大宅壮一文庫を利用して、網羅的な記事検索を行った上で、実際に個別の新聞記事および雑誌記事に当たり、内容の分析を行った。

(2) 探索型のフィールドワーク

2つ目は、探索型のフィールドワークである。この方法は、現代日本において全国で行われている祝祭の現場に実際に出向いて、実施状況をつぶさに見学することと、地元の図書館で関連する文書資料を収集することをセットにした方法であり、4年間を通じて20か所を超える祭りに対して実施した。

調査初年度は、「よさこい系祭り」の中でそれまで訪れたことがないものの中から規模や影響力の大きいものを選定し、「にっぽんど真ん中祭り」(愛知県名古屋市)、「神戸よさこいまつり」(兵庫県神戸市)、「にいがた総おどり祭り」(新潟県新潟市)、「YOSAKOIさせば祭り」(長崎県佐世保市)、「よさこい東海道」(静岡県沼津市)の5か所に出かけた。2年目の2014(平成26)年度は、前年度の方針を継続し前年に訪問できなかったものを中心に選定し、「茂原七夕まつり」(千葉県茂原市)、「こいや祭り」(大阪府大阪市)、「みちのくYOSAKOIまつり」(宮城県仙台市)、「ふくこいアジア祭り」(福岡県福岡市)、「瑞浪パサラカーニバル」(岐阜県瑞浪市)、「浜松がんこ祭り」(静岡県浜松市)の6か所を訪れた。つづく3年目の2015(平成27)年度は、前年までの方針とともに個性的な運営を行っている祝祭を選定し、「京都さくらよさこい」(京都府京都市)、「常陸国YOSAKOI

祭り」(茨城県大子町)「おどるんや～紀州よさこい祭り」(和歌山県和歌山市)「うつくしま YOSAKOI まつり」(福島県郡山市)「安濃津よさこい」(三重県津市)「ODAWARA えっさホイおどり」(神奈川県小田原市)「冬のよさこいソーズラ祭り」(静岡県伊東市)「御燈祭り」(和歌山県新宮市)「浜松がんど祭り」(静岡県浜松市)の9か所を訪れた。そして、最終年度の2016(平成28)年度は、これまでの3年間に訪問の機会がなかった祭りに加え、その後の展開で再訪が必要となったものを選定し、「ヤートセ秋田祭り」(秋田県秋田市)「うるま市エイサー祭り」(沖縄県うるま市)「YOSAKOI させば祭り」(長崎県佐世保市)「YOSAKOI ソーラン日本海本祭」(石川県宝達志水町など)「冬のよさこいソーズラ祭り」(静岡県伊東市)の5か所を訪れた。

(3)集中的なフィールドワークの実施

3つ目に、4つほどの対象にしぼって、より集中的なフィールドワークを実施した。

1つ目は、「東京高円寺阿波おどり」(東京都杉並区)である。1957(昭和32)年に立ち上げられた徳島市「阿波おどり」の最大の分派であり、既に60年を超える歴史を持っている。さらに、前述の通り、1980年代末に松平誠が「合衆型祝祭」という用語を生み出す契機となった祭りであり、その後の経緯を調べることはその追跡調査の意味合いもある。調査地としてもっとも近いこともあって、4年間を通して、実施主体としてのNPO法人東京高円寺阿波おどり振興協会を通じて、祭り当日や準備の見学、各連の練習風景の見学、連長や踊り子に対するインタビュー・インタビュー、ボランティアとしての参加など、さまざまな形での調査を実施した。

2つ目は、「おかやま桃太郎まつり うらじゃ」(岡山県岡山市)である。1994(平成6)年に立ち上げられ、既に20年余りの歴史を持つ、かなり独立色の強い「よさこい系祭り」である。調査初年の2013(平成25)年に全日程の見学と地元図書館での資料収集を実施した後、2014(平成26)年3月に実施された20周年記念ミュージカルの折に、実施主体であるうらじゃ振興会と接触し、見学とともにインタビュー・インタビューを行った。さらに、2016(平成28)年8月の祭り本番の両日には、うらじゃ振興会の紹介で、終日にわたって祭り会場の運営の見学やボランティア・スタッフへのインタビューを実施した。

3つ目は、「よさこい祭り」(高知県高知市)である。調査3年目(2015年)の祭り本番4日間、全16会場を回り、精力的に見学するとともに、図書館・よさこい資料館での文書資料の収集を実施し、2017(平成29)年2月には、資料の乏しいここ10年ほどの状況に関して主催者側の事情に詳しい関係者にインタビュー・インタビューを実施した。

4つ目は、「YOSAKOI ソーラン祭り」(北海道札幌市)である。この祭りに関しては、2015

(平成27)年に祭り本番に訪れ、多くのサテライト会場を含めて精力的に見学すると同時に、図書館で文書資料の収集を実施した。また、後述する「合衆型祝祭」の負の側面である住民とのトラブルに絞って、国立国会図書館などを利用して新聞記事や雑誌記事を収集・分析した。

4. 研究成果

研究の成果は、以下の5点にまとめられる。

(1)祭りごとの違い、地域ごとの違い

まず、最初の成果は、「合衆型祝祭」の多様性についてである。探索型のフィールドワークで多くの祭りに訪問することを通じて、個々の祭りや個々のタイプによって、規模も、実践の内容も、目的も、実施主体も、地域との関係も実に多種多様であることを思い知らされた。

たとえば、最大勢力を持つ「よさこい系祭り」を例にとっても、その内部には、実に多くの違いがある。

規模でいえば、参加チーム数が20ほど、観客も1000人ほどの祭りがあるかと思えば、参加チーム200以上、観客100万人以上にも達する祭りもある。東京・大阪・名古屋のような大都市の中心部で行われる祭りもあれば、自然豊かな地方都市で実施される祭りもある。実践の内容に注目すれば、高知のように道路を用いて前進して踊る「流し踊り」が中心の祭りもあれば、札幌や名古屋に代表されるように、ステージでの演舞が中心となる祭りもある。目的や組織に注目しても、地方自治体や商工会議所が主催者に名を連ね、地域住民の年中行事や観光客を呼び込むための重要な行事となっている祭りもあるかと思えば、集まってくる踊り手やチーム自身が参加型観光の顧客というスタイルの祭りもあるし、普段は、活気のない地域や駅前商店街の活性化のための地域おこしイベントとしての祭りも多くある。どの祭りも、それぞれ現代日本社会で生じている変化を背景に成立しているとはいえ、どの祭りに注目するかで、東京一極集中 地方の凋落、少子高齢化 人口減少 限界集落化、郊外化 地域共同体の解体といった変化のどこに照準するかは自ずと変わってくる。それゆえ、「阿波おどり」「よさこい系祭り」というくくり以上に、個々の祭りの抱える事情に踏み込むことが社会的な分析には必要であることが判明した。

こうした認識の上で、以下、新たに手にした知見として3つのポイントを挙げたいと思う。

(2)1980年代以降の「合衆型祝祭」進展の軌跡

今回の調査は、私自身がこれまでに行った調査研究を含めて、既存の研究成果に関する追跡調査としての意味合いがある。

たとえば、松平誠が1980年代末に調査し

た「東京高円寺阿波おどり」に関しては、今回の調査の結果、1990年代以降もより一層「合衆型祝祭」としての傾向が強まっていくことが判明した。踊り集団である連は、ますます高円寺の商店街や町会との結びつきが弱くなり、以前は多かった金融機関などの地域に存在する団体の参加も少なくなった。その一方で、増加したのは、自立連といわれる阿波おどりが好きな人々が自発的に集まって作る趣味縁的なグループである。この傾向の広まりとともに、連の数は増加し、メンバーの住所はますます広域に散らばり、職業も多様化していったことが分かった。

「よさこい系祭り」に関しては、従来、1992年の「YOSAKOI ソーラン祭り」の立ち上げ以降、2000年代前半までの急成長の時期に焦点があてられる傾向があった。しかし、今回の調査の結果、2000年代の中盤以降、新たな段階に入っていることが判明した。「YOSAKOI ソーラン祭り」をはじめ、地方に拠点を置く多くの祭りがこの時期以降、停滞や衰退の傾向を示している一方、「にっぽんど真中まつり」（愛知県名古屋）、「こいや祭り」（大阪府大阪市）をはじめとして、中京圏から関西圏を中心に、参加者や運営者の中心を大学生に置く大都市圏の「よさこい系祭り」が急成長し、今や高知や札幌と肩を並べるまでに拡大している。この結果、地方から地方へと拡大してきたといわれた「よさこい系祭り」においても、大都市の比重がかなり高まることとなった。

以上のように、本研究では、「合衆型祝祭」の近年の変化と現状について明らかにすることができた。

(3) 個性と共同性をめぐって

今回の調査では、「よさこい系祭り」において、2000年代以降に拡大した「総踊り」という現象に注目した。「総踊り」とは、祭り全体や一部のパートの終了時を中心に行われる集団的演舞のことである。通常は、チームごとに別々の個性的な演舞を繰り広げている踊り手がチームの垣根を超えて数百人から数千人の規模で一斉に同じ伴奏で踊る。場所によっては、踊り手と観客の垣根さえ取り払って行われることもある。

この現象に注目してみると、「よさこい系祭り」に代表される「合衆型祝祭」の捉え方はかなり大きく変わる。これらの現代的な祝祭では、好みを共通にする人たちだけと一緒に、衣装も楽曲も振り付けもきわめて個性的な演舞を行う。それゆえ、この種の祭りは、きわめて個人化した形態に見える。しかし、「総踊り」では、一転して、チームごとの個性は捨て去られ、多くの人たちと同じ振り付けで踊ることから得られる一体感や連帯感を楽しむ共同性が重視されているのである。つまり、祭りは、これまでしばしば言われてきたように、共同性から個人性に向かって変化していると捉えるのではなく、共同性と個

人性の充足の形態やバランスが変化してきたと考えるべきであると思われる。

(4) 「受益圏」/「受苦圏」への注目

今回の調査で得られた有効な知見のひとつは、「合衆型祝祭」という新しい祝祭の形態が従来注目されてきたプラスの側面だけでなく、マイナスの側面をはらんでいることである。従来の地域共同体を基盤とする祭りの場合、祭りへの参加は、本人の意思とは別のレベルで、既に決められている。つまり、祭りのある町内に生まれた者は、好きでも嫌いでも参加せねばならない一方で、祭りのある町内に生まれなかった者はどれだけ望んでも参加できない。つまり、祭りへの参加とは、町内に生まれた者の義務であり、権利であるのだ。この点、「合衆型祝祭」では、祭り集団がメンバーの自発性によって形成されるがゆえに、祭りへの参加も個人が自由に決められる案件となった。さらに、集団レベルに関しても、従来、当該の地域の祭り集団にとって、祭りへの参加は義務であり権利でもあった。この集団レベルの参加に関しても、「合衆型祝祭」においては自由化され、集団の自主性に任されるようになった。そして、その結果として、全国各地の祭りに参加して、何度も自分たちのパフォーマンスを披露する集団が多く登場することとなったのである。

これら個人レベルおよび集団レベルの祝祭参加の変化は、やる気のある個人やグループに機会を提供する自由化として、従来、メリットとしておおむね好意的に評価されてきた。しかし、今回の調査結果を分析してみると、新しい祝祭形態の拡大には、デメリットとしての部分が存在することが顕著となった。個人レベルでの自由化は、祭り集団のリーダーからみれば、メンバーの流動化を意味し、集団レベルの自由化は、祭りの主催者からみれば、参加する祭り集団の流動化を意味する。それゆえ、安定した高品質なパフォーマンスを望む祭り集団のリーダーや祭りの主催者からみれば、この自由化は良いことばかりではない。さらに、これらの自由化は、祭りでパフォーマンスをする個人や集団が、会場を提供する地域からみれば、急速に外部化することを意味している。つまり、自分たちの地域の祭りで踊っている人や集団の中にどんどん余所者が増えてくるのである。言い換えれば、かつての地域共同体を基盤とする祭りにおいては、祭りの実施によってメリットを得る人々（＝「受益圏」）とデメリット（ないしコスト）を支払うべき人々（＝「受苦圏」）とは、会場となる地域共同体がともに担うものであった。しかし、現代の「合衆型祝祭」においては、「受益圏」を構成する余所者 祭り参加者と「受苦圏」を構成する地域住民とは少なからず分離してしまうことになる。ここに、地域住民と祭り参加者との乖離と衝突が生まれる根本的な原因があ

る。つまり、祭りをめぐる参加者と住民とのトラブルの頻出は、祭りへの参加が大幅に自由化され、祭りが趣味縁的な集団によって担われるようになった変化と裏表の現象なのである。

(5)現代日本社会への逆照射

以上、現代日本社会における祝祭の変容を対象として、自発性による集団形成や活動参加、単なる個人化ではない個人性と共同性の新しいバランスの構築、活動の舞台となる地域における受益圏と受苦圏のズレに起因する参加者と住民との衝突といった特徴を本研究の成果として指摘してきた。

しかし、これらの諸特徴は、単に祭りの世界の出来事だけにとどまらない、現代日本社会全体に通底する特徴でもある。個人が自分の意志に基づいて自発的に行動を選択したり集団を形成したりする機会は以前よりも拡大している。その分、この社会では、強制的か半強制的に集団への参加や活動への参加を強いられる不条理な苦悩は低減しているといえよう。しかし、それはメリットばかりを生むわけではない。われわれは、身体を持つ動物であり、それゆえ、コミュニケーションや活動を行う際に、特定の物理的空間を必要とする。このことは、各種のメディアが発達した現在でも基本的には変わらない事実である。ここに、自発的に自分たちの意思や好みをもとに集まる人たちが、特定の地域にしばられることなく広大な範囲から集まってくることになる一方で、コミュニケーションや活動の舞台となる物理的空間に住む人々の多くは、その活動への関心を持たず、そうした活動自体を迷惑としてしか受け止められなくなるといった非対称的な事態が出現する。こうした事態は、ここで取り上げた祝祭の世界だけでなく、公園や学校の騒音問題をはじめとする様々な近隣トラブルなどに見られるように、いまや広範に存在する現代社会の問題なのだと考えられよう。

当然、これらの問題に関しては、単なる指摘だけではなく、どのような解決の方法があるかを探ることが必要になると思われるが、それについては今後の研究課題としたいと思う。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

芳賀 学、現代祝祭をめぐる受益圏と受苦圏 YOSAKOI ソーラン祭りに対する批判を切り口として、上智大学社会学論集、査読無、No.40、2016、pp.1-16

芳賀 学、祭りから見える日本社会、社会学論叢(日本大学社会学会) 査読無、No.186、2016、pp.1-28

芳賀 学、現代「総踊り考」「よさこい系祭り」にみる共同性と個別性、上智大学社会学論集、査読無、No.38、2014、pp.25-42

6. 研究組織

(1)研究代表者

芳賀 学 (HAGA, Manabu)

上智大学・総合人間科学部・教授

研究者番号：40222210